

若者へのメッセージ①7

作家 玄侑 宗久

【第一回】「白」「意識」と「字」「意識

私は今でも墨を摺って卒塔婆そとうばを書いているが、どんなに忙しくとも墨を摺る時間は大事にしたい。書く内容を吟味するだけでなく、無心に墨を摺っている時間そのものが心地いい。単純な作業を丁寧にしつつけることは、最も無心になりやすい状況ではないだろうか。

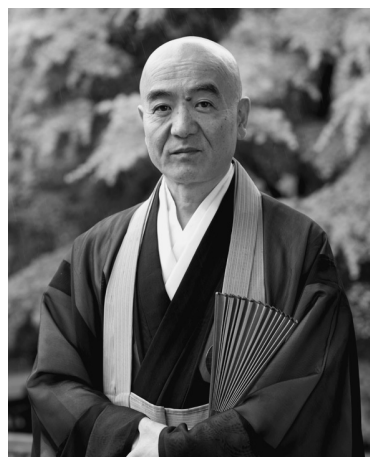
書は一生もの

書道の思い出というと、まずは小学校の頃に通っていた小さな私塾を憶おもいだす。たしか週三回だったと思うが、カーペットの敷かれた薄暗い畳の部屋に、時代がかった細長い坐すわり机が十個ほど置かれ、正坐せいざして墨を摺すっていた記憶が甦よみがえる。どういうわけか記憶の中の私はいつも墨を摺っており、実際に字を書いている時間は記憶から抜け落ちている。どうということなの

だろう。

そこではとにかく正坐して心を鎮め、まっすぐに墨を摺るよう教わったのだが、すでに硯すずりじたいが激しくへこんでいて、墨を摺りながら油断するとへこみにぶつかって墨がはじく。どの子もたいてい胸元や腕を汚していたような気がする。

その日の課題の文字を書き、半紙を一枚提出すると、お爺おじいちゃん先生が朱色の墨で修正したり○印をつけてくれたりする。あまり褒ほめない



玄侑 宗久（げんゆうそうきゅう）

1956年福島県三春町生まれ。慶応義塾大学文学部中国文学科卒業。現在は福聚寺住職の傍ら、花園大学仏教学科および新潟薬科大学応用生命科学部の客員教授、福島県警通訳、福島県立医科大学経営審議委員、「たまきはる福島基金」理事長、鈴木大拙館アンバサターなど。2001年、『中陰の花』で第125回芥川賞受賞。また2007年には柳澤桂子氏との往復書簡「般若心経 いのちの対話」で第68回文藝春秋読者賞、2009年、妙心寺派宗門文化章受賞。2012年、仏教伝道協会より第一回沼田奨励賞受賞。2014年には東日本大震災の被災者を描いた短編集『光の山』にて芸術選奨本賞受賞。近著は『風流ここに至れり』（幻戯書房）、『お寺からの賜りもの』（大法輪閣）、『仙厓 無法の禪』（PHP研究所）など。公式サイトは、<http://genyu-sokyu.com/>

先生だったから、○を付けられると子供心にも嬉しかった。

老先生は、結局文字の書き方というよりも、正坐やお辞儀、文字を書く構えなど、日本人としての躰しづをしていたようにも思える。

中学生になると、近所に住む別な先生のところへ通うようになった。以前の先生のところはどうにかなったわけではないのだが、そこはたいてい小学校を卒業すると卒業していくような暗黙の了解があり、中学生以上は通っていないかった。

町内には別にいわゆる書家がいって、姉や弟はそちらの先生に習ったのだが、そこで習っている人の文字はすぐに判る。それだけ影響力が強いということなのだろう。私はそんなふうに染まるのが嫌で、別な仕事をしながら趣味のように夜だけ書道を教える先生のところに通ったのである。

その頃の私は、自分の書く文字が好きになれなかった。好きになれないからできるかぎり先生のお手本を真似まねて書いた。そんな生徒なら先生への覚えも悪くなかっただろうが、どうも中学生時代の書道の記憶は小学生時代よりもはっきりしない。

夜だけの教室だから、墨はたしか墨汁だった。墨を摺る時間を省略して書く時間を確保したの

だろうが、それがどうも記憶の薄さに繋がっているように思える。

私は今でも墨を摺って卒塔婆そとうぼを書いているが、どんなに忙しくとも墨を摺る時間は大事にした。書く内容を吟味ぎんみするだけでなく、無心に墨を摺っている時間そのものが心地いい。単純な作業を丁寧にしつつけることは、最も無心になりやすい状況ではないだろうか。

自意識の問題と「書は人なり」

中学生や高校生というのは、思えば自意識が芽生える頃でもある。自意識の定義は難しいが、いわば希望と現実の落差が産みだす複雑なコンプレックスかもしれない。

そんな時代に書道をしていると、どこから「書は人なり」などという言葉が聞こえてきた。今となっては誰に聞いたのかも憶いだせないが、その言葉が私に与えたプレッシャーは大きかった。

自分の書く文字が好きになれずにいた時代に、その言葉を聞いたのである。当然、文字だけでなくそれを書く自分も嫌いになり、書けば書くほどその気持ちは強まっていったように思う。

たしか高校に入学してまもなく、書道に通うことじたいを辞めてしまった。

それからの私は、たぶん数年は筆文字を書かなかったと思う。考えてみればそれは、恰度ちやど自分の生き方に悩む時代でもあった。僧侶になるか物書きを目指すか、揺れながら不自由な二者択一に悩んでいたのである。

ただそうして悩む時代であっても、私の目には魅力的な墨跡ぼくせきが次から次と飛び込んできた。一休、宮本武蔵、良寛、大燈国師だいてうこくし、あるいは昔の政治家や文人の書なども、なるほど「書は人なり」と思わせるものが多かった。

自分で書く文字は二十代の後半までずっと好きになれなかったのだが、それでも修行道場に行き、三年間「筆硯ひつげんを弄ろうるなかれ」という暮らしをしたあとで久しぶりに書いてみると、どうも字が違う。悪くないね、と初めて思えたのである。

おそらくこれも、自意識の問題だろうと、今では思う。自意識の変化が字意識を変えたのである。このことから私がいま思うのは、壁にぶつかったらしばらく休んで気長に待ってみる、ということだ。我武者羅がむしゃらにぶつかっても破れない壁が、他のことに没頭しているうちに影も形もなくなってしまう。そんなこともよく起こるものだ。

書は一生のもの。気長につきあいたいものである。